

ねば杉っ子餅

調査団体名 : ねば杉っ子餅
 設立年 : 1999(平成11)年
 団体URL : http://nebakanko.com/shisetsu/neba_sugikkomochi.html#
 活動拠点 : 長野県下伊那郡根羽村1855
 取材日 : 2013年11月27日

団体代表者名 : 石原みちゑ
 対応してくれた人の名前 : 石原みちゑ、原 小夜子
 調査員 : 洲崎燈子
 レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容

根羽村の40～70代の主婦15人ほどの団体で、原木椎茸を使ったきのおこわ、よもぎの草大福、米粉を練ったからすみ、ねぎ味噌たれの五平餅など、地元の素材を活かした手作りの農産加工品を生産し、自家製の野菜とともに村内外のイベントで販売している(主に週末)。岐阜女子大学の学生との共同で、森林組合が根羽杉で作った弁当箱に根羽の山の幸いっぱいのお弁当を入れた「根羽のはこいり娘」も開発した。村内のイベントや仏教行事での食事の提供もっており、250人分の食事を作ることもある。

キャッチフレーズ

地産地消で生涯現役！

会のモットー(何を大切にしているか)

根羽にある物を使う、根羽にいる人を使う。お客さんとお互いの顔が見える対面販売にこだわる。からすみや豆餅など伝統の行事食を定番の商品にして、根羽の味として伝えていく。村の農産物を使うとメンバーも張り切って野菜を作ってくれる。メンバーには「家に引きこもらず、体が動くうちは来て」「この仕事がある日は限られているので、こちらを優先して」と働きかけている。メンバーが培ってきた知恵や技術を活かし、お客さんに喜んでもらうことの生き甲斐を感じられる場になっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

何度も試食し、お互いに注意して真剣に商品開発を行うようになった。お客さんの反応もよく見るようになり、商品を食べてもらうことに緊張感を感じるようになった。イベントに出店する時、経験に基づいて出店先の客層や天候によるニーズの違いを見極め、売る商品や量を変えたり、売り手も買い手も運ぶのが大変な重量級の野菜(大根、白菜など)を避けるなどの工夫をするようになった。年収が500万円に届くようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

根羽村、安城市、アイシン、株式会社JTN、岐阜女子大学など。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

村内の主婦に、負担にならない勤務体制で、子どもを抱えて正規で働けない人や自営業者の奥さん、定年退職者にも末永く働ける場を提供している。メンバーの中には70代後半で入院しても「杉っ子餅に行かなきゃ」と言い、退院したら杉っ子餅に戻って亡くなる寸前まで働いていた人もいる。

現在直面している課題

・現在は石原、原の両氏で会を取り仕切ってうまくやっているが、後継者の確保が課題。新しい人も少しずつ入っているが、責任を持ってやってくれるかは未知数。
 ・本当は毎日、半日でも活動できるといいのだが、取り扱っている商品に餅など日持ちがしない物が多いため、販路がはっきりしないと難しい。

今後やってみたいこと

日持ちする商品が少なく、根羽村の複合施設ネバーランドなどでの販売が難しいので、冷凍できるからすみ(カット済み)を随時解凍して販売できるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

ネバーランドなどとの商品情報の共有と連携。

チームオリジナルの質問

<質問内容>活動している上での苦勞を教えてください。

<答え>村外のイベントに出店する際は深夜2時、3時から準備を始めることもある。そんな時も、活動日が限られていることもあるが、メンバーが積極的に出てきてくれるのがありがたい。活動場所(旧保育所)の隣が墓地で夜は少し怖いですが、今は昔と違って火葬だから大丈夫と皆で言いながらやっている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>原木椎茸ほか、きのこの栽培について教えてください。

<答え>村内できのこの原木となる広葉樹を販売している。きのこおこわの椎茸は村内で原木栽培している方から買ったり、メンバーが自前で少量栽培しているものを持ち寄って調達している。原木はほとんどマキ(アベマキ)で、樹皮が厚いためとても長持ちする。シデの木も原木にするが、椎茸は早く出るものの、樹皮が薄く長持ちしない。シデ、サクラはナメコ栽培にも使う。

その他、伝えたいこと

組織が続かないと元も子もないので賃金の大幅アップはできないが、年末にささやかながら各メンバーが働いた時間に応じた手当を支払う。するとメンバーのやる気がアップする。今年度は収益で初めて旅行に行く(なばなの里)。個人経営ではないので、黒字になればその分を分け合う(機械の修繕代を除いて)。活動を続けてこられたのは、メンバーそれぞれの家族が応援してくれていることも大きく、ありがたい。

写真



原さん(左)と石原さん(右)



よもぎ大福作成風景



「根羽のはこいり娘」の弁当箱



心温まるおもてなし。右下が名物のからすみ